
ただし情熱は鼻から出る

さや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただし情熱は鼻から出る

【Nコード】

N2169Y

【作者名】

さや

【あらすじ】

人外ホストに胸キュンするだけの簡単なお仕事です。不定期更新となります。あらかじめご了承ください。

偏見まみれのホスト紹介

ようこそいらっしゃいませ。

本日のご指名はいかがなさいますか？

……………おや？

お客様。当店のご利用は初めてでいらっしゃる。

それでは、僭越ながら自分が簡単に説明させていただきます。

ここは欲望都市シルバーバレーにおいて、今もっともホットなホストクラブ「レジェンズ」です。

こちらでは、お客様の幅広いニーズにお応えできるよう、様々な人外ホストを取り揃えております。

来店毎にお好きなホストをご指名いただくシステムになっておりますが、特にご指名が無い場合は空いているホストが順次お相手させていただきます。

お客様のお眼鏡に適う者がいらっしゃれば幸いです。

ああ、そうだ。

指名率の特に高い5名がおりまして、フリーでの入店になりますとおそらく彼らが席に着く事は無いと思われますので、あしからず。

…おっと？

お客様は、その5名に興味がおありですか。なるほど。

では、自分の主観で恐縮ですが、彼らについて手短に紹介させていただきますでしょう。

まず、シルバーバレーの中でも最高のホストと呼び声の高い当店不動のナンバー1。

ミノタウロスの「タッチちゃん」さん。

身長190を超える巨体とそれを包む焦げ茶の毛皮、キリリとした深緑の瞳が特徴的です。

都市中のホストの憧れの存在で、渋く潔く思慮深く情に厚く、これぞ真の大人の男といった性格と見目は老若男女問わず人気があります。

かく言う自分も彼のファンでして……っと、失敬。説明に戻ります。

本気で入れ込まれるお客様も多いですが、しかし、彼を独り占めしようとする方は1人もいらっしゃいません。

なぜなら、タッチちゃんさんの器が大きすぎるが故に、自らの手には余ると誰しもが考えになるからです。

次に、ナンバー2。リザードマンの「リッチちゃん」さん。

身長はだいたい200弱。レジェンズの中で一番背が高いのは彼です。

少し固めの緑の鱗と黒く鋭い爪は、どちらかといえばトカゲよりもワニを連想させますね。

最初に注意させていただきますと、彼はかなり強引なタチなので

ハッキリNOが言えないお客様にはあまりお勧めできません。

自分の事を俺様なんて言う時点で推して知るべしですね。

彼のお客様から聞いた話では、その強引なところが良いのだそうですが…。

…え？リッちゃんさんを嫌いなのかって？

ははは。まさかそんな。ははははは。面白い事をおっしゃる。

リッちゃんさんはナンバー1のタッちゃんさんにかなり傾倒していますので、彼の前でタッちゃんさんの話題を出すのは止めた方が良いでしょう。

良く言っても悪く言っても、長々とタッちゃんさんの話を聞かされる羽目になりますからね。

そして、ナンバー3がスケルトンの「スケルン」さん。

まあ……骨です。身長は185程度ですね。

間違つてスカルと呼ぶと少々機嫌を損ねてしまいますのでご注意ください。

とにかく女性の方が好きなのだそうで、常にテンションが高いです。

ああ。女性が好きと言っても、本人の許可なくセクハラを行う様な弁えを知らぬ男ではございませんのでご注意ください。

彼と一緒にパァッと騒ぐことで、ストレス解消になるのだとおっしゃられるお客様も多いですね。

ノリが合わない或少々キツいかも知れませんが、ホストクラブという場を気軽に楽しみたい方などにお勧めです。

続きまして、ナンバー4。マンドレイクの「ドリー」さん。

レジェンズに数多くいるホストの中でも最年長なのですが、基本が植物なので見た目には年齢を感じさせません。

また身長が100センチ程度と非情に低く、その幼くも恐ろしい容姿と相まってどこかマスコットの的な扱いを受けています。

さらに、ドリーさんは自らを売り込む術を熟知しており、いい年してカワイコぶ…いえ、まるで無垢な少年のごとき言動にてお客様を誑か…ごぼつ、虜にしているようです。

彼は欲望に忠実かつおねだり上手なところがありますので、金銭面に余裕が無ければあまりお勧めできません。

何でもお客様によれば、そのブラックホールの様な真つ黒な瞳に見つめられると、どんな願いも叶えてあげたくなるのだそうですよ。

……え？

さつきから営業妨害になりそうな発言をしているけどいいのかって？

ええ、ええ、もちろん。我々はお客様第一をモットーにしておりますから。

心から楽しんでいただくためには、真実を隠蔽する様な真似は無粋の極みでしょう。

最後にナンバー5。マーマンの「パパン」さんですね。

身長は180と少々。黒目がちな瞳に、ロイヤルブルームーンストーン（薄い青みを帯びた宝石）のような光沢のある鱗。

滑らかな曲線を描く肉体はどこか中性的かつ神秘的な魅力があるとはお客様の談ですね。

どうもあまり目がよろしく無いようで、陸上ではいつもメガネをかけています。

非情におっとりした物腰の柔らかな人で、しょっちゅうお客様が

ら悩みや愚痴や相談などを受けているようです。

時折、店内の巨大水槽で泳いでいる姿が見られます。光の加減で虹色に輝くヒレが優雅に舞って、とても幻想的だと好評を得ております。

以上が、レジエンスのトップ5の説明になります。
いかがでしたでしょうか？

ちなみに、自分は新人の山田と申します。
この界限では珍しい、ただの人間でございます。
以後、お見知りおきを。

さて、お客様。本日ご指名のホストはお決まりましたか？
…それは結構。
では、どうぞ。ごゆっくり夢の一夜をお楽しみください。

………
………
…

「ご新規様、1名入りまあす！」
『いらっしゃいませえーーーーッ！！』

山田の先輩観察記

レジェンズに雇われてから早半月。

普通のホストクラブと違い、ホストそれぞれが好き勝手な格好をしている事にもようやく慣れて来た。

それはそれとして…。

先日、オーナーに先輩達を見て接客を学べと言われたので、まずは突出した指名数を誇る5人を観察する事にした。

正直、『ただし人外に限る』という条件が大半を占めている気がするので、本当に彼らを参考にして役に立つのか懐疑的にならざるを得ないのだが…まあ、ほんの少しでも収穫があればそれで良しでしょう。

とりあえず、今回は新規の客のあしらい方について注目してみた。

永遠の憧れタツちゃん先輩の場合

タツちゃん先輩は奇抜な服装で出勤する輩が多い中で、普通にスーツを着用している正統派だ。

ただし、その色はホストらしく紫だが…。まあ、似合っているから問題ないだろう。

絶妙にはだけられたブラウスから除く筋肉が何とも言えぬ男の色香を漂わせており、それを目にした多くの女性が悩ましげに感嘆のため息を漏らしていく。

瞳を潤ませ頬をほんのりと薄紅色に染めたその姿は何とも官能的だ。

存在だけで彼女らの『女』をこうまで引き出すタツちゃん先輩はさすがとしか言いようが無い。

ともあれ接客だ。

タツちゃん先輩は外向きに広げて座る足の腿に腕を置いて、軽く身を屈めた状態で話をしている。

おそらく、背の高いタツちゃん先輩がより近い位置で相手と顔を合わせて会話するために意識的にやっている事なのだろう。

パツと見では厳つい容姿をしているようでも、彼の纏う空気は優しく、傍にいとそれだけで何者からも守ってもらえそうな不思議な安心感がある。

「お前さん、こういう場所は初めてなんだそうだな。

慣れない場所で緊張するかもしれないが…まあ、ゆっくり楽しんで行くと良い。」

穏やかに目を細めながら紡がれる言葉に対し、当の女性は真っ赤になって何度も首を縦に振っている。

聞いたところによると、彼のその見目に相応しい重低音の声を間近で耳にすれば、それだけで腰が砕ける威力があるのだとか。

…もう存在自体が18禁だと言って差し支えない気がする。

緊張している客のテンポに合わせてか、ポツリポツリと会話をするタツちゃん先輩だったが、しばらくするとおもむろに席から立ち上がってこう言った。

「スマンが、他にも指名が立て込んでな…。

なに、この店のホストは皆ベテラン揃いだ。悪いようにはならんだろう。」

不安そうに見上げる彼女の肩をポンポンと手の平で軽く叩いてから彼は別の席に移動した。

去り際に短い会話の中で把握したらしき、彼女の食いつきそうな

話題について引き継ぐタツちゃん先輩のやり方は実にスマートだった。

そのおかげもあってか、入れ替わりにやって来た新たなホストにたじろいでいた女性も段々と楽しげな表情に変わっていく。

とは言え、やはりタツちゃん先輩という存在の前には敵わないように、再び戻って来た彼が隣りに腰を下ろすと女性は明らかに先程よりも緩んだ表情を見せた。

帰る頃にはすっかり店内の雰囲気にも慣れたらしく、出口へ向かう彼女はどこか満足気な顔をしていた。

見送りに現れたタツちゃん先輩は、その表情を見て小さく頷きつつ最後にひとつ声をかける。

女性は、彼が無意識に行った腕を組む仕草に少しばかり見惚れているようだ。

…何と言う反則フェロモン。

「今日は楽しめたか？」

あまり相手をしてやれなくてすまないな。

夜道は暗い。充分気をつけて帰れよ。」

意外にも彼は2度目の来店を促す様な言葉を口にはしなかった。

女性は自ら興奮気味に、再びこの店を訪れ彼を指名するのだと息巻いていた。

以後、彼女は1週間と空けずレジエンスに入り浸る常連となったのだが、そうさせたタツちゃん先輩を素直にすごいと思う。

自分は、いつかこの人に追いつくことが出来るのだろうか…。

傲慢トカゲことリッちゃん先輩の場合

やる気があるのか無いのか、リッちゃん先輩はよくＴシャツにジーンズ等といったラフな格好で出勤して来る。冬はそれにプラスしてレザージャケット着用だ。

それだけならまだ良いが、彼の腕や首には金色の装飾品が無駄に多くぶら下がっていて、それらが厳つい容貌と相まってチンピラのような雰囲気醸し出している。

コレを初見で指名するお客様の目は一体どうなっているのだろうか？

リッちゃん先輩はドカリと音がする乱暴さで女性の隣りに座ったかと思えば、足を組んで腕をソファアのへりにかけ踏ん返り返っていた。

時折、その太い尻尾を床にビタビタと打ち付けており無駄な威圧感を発揮している。

「よう。俺様を選ぶとは、お前なかなか目が高いじゃねーの。」

そして一言目がコレだ。

初っ端からどこまでも偉そうな男。自分ならこの時点で帰っている。

なぜ彼女はこんなチンピラの上から目線な言葉に対し、嬉しそうに微笑んでいるのだろう。

…全く理解に苦しむ。

リッちゃん先輩は女性から話しかけられるも、聞いているのかいないのか「ふーん」だの「あー」だの適当な相槌ばかり打っている。まあ、何だかんだでしっかり内容を覚えているのは、他の客を相手にしている時の言動で分かってはいるのだが…それにしても酷い。

かと思えば、彼女の話の遮っていきなりこんな事を言い出した。

「なー、お前さ。カラアゲ食いたくね？カラアゲ。

食いてえよな？よし、決まりだ。

おい、暇そうだな山田あ！カラアゲ2皿、すぐ持って来い！客待たせんじゃねーぞ！」

いや、単にお前が食べただけだろ！

客がどうこう言うなら、リツちゃん先輩のソレは初見の相手に取る態度としてどうなんだよ！？

ああ…、この横暴に怒らないお客様はまさに神様だ。

むしろクスクス笑ってらっしゃるんですけど、それってどういう心境なんでしょうか？

是非ご教授いただきたい。

言いつけ通りにカラアゲを持って行ったら遅いと罵られた。くそ
う。

そして、隣りの女性そっちのけでガツガツと獲物のほとんどを胃に収めたかと思うと、彼は大きく息を吐き、かつたるそうに立ち上がってヒラヒラと手を振りながら言う。

「ワリイけど、俺様売れっ子だからお前にばっか構ってらんねんだ。
………つて、ばあーか。

んな辛気臭えツラしてんじゃねーよ。イイ子にしてたらまた来て
やつからよ。」

ニヤニヤとした笑みを貼り付けて乱暴に相手の頭を撫で回すリツ
ちゃん先輩。

彼女の髪の毛をくしゃくしゃにしておきながら、彼はそれに構う
ことなくさっさと席から離れて行った。

あっさりと置いてきぼりにされた女性は、自らの髪を整えながら彼の背を名残惜しそうに眺めていた。

理解不能。全くもって理解不能。

それから一応とばかりに1度だけ席に戻って来たリツちゃん先輩だったが、自分の目には最後まで彼が好き勝手しているようにしか見えなかった。

いや、色々命令された腹いせに言ってるわけじゃないぞ。うん。

彼女の帰り際、見送りに来た彼はいきなりその華奢な手首を掴んで至近距離から平淡に言い放つ。

「お前、絶対また来いよ。1週間…いや、5日だ。5日以内に来い。それで、次も俺様を指名しろ。分かったな？」

…これが噂に聞くオラ営（オラオラ営業の略。強引な接客スタイルの事）か。

無いわ。お客様に命令とかマジで無いわ。何より、その言葉に頬を染めて頷くお客様が1番無いわ。

結局、リツちゃん先輩から役に立ちそうな接客術を学ぶことはできなかった。

見る人が見れば何かが違ったのだろうか？…………謎だ。

骨骨ロツクなスケルン先輩の場合

スケルン先輩の事だ。性格同様、目に痛いド派手な服装をしているのかと思いきや、意外にも地味目の民族衣装のような服を好んで着ているようだった。

日によって趣向を変えているようだが、甚平やアオザイやチャイナ服などのアジアテイストの物が比較的多く見られる。

それはともかく。

正直、スケルン先輩の席に着くのは後の疲労が半端無いから気が進まない。

あまりにテンションが高すぎて、とてもじゃないが自分にはついて行けないのだ。

彼は新規の客である女性を見るなり、席に座りもせずに次々と奇妙なポーズを決めながら自己紹介を始めた。

「イエーイ！ご指名シーンキュー！

オレ、スケルン。よろしくうーっ！」

ポーjingの際の骨同士がカツカツとぶつかり合う音まで鬱陶しい。

当の女性客は、初っ端から全力投球なスケルン先輩を目の当たりにして呆氣にとられてしまったようだ。

ポカンと口を開けた状態で固まっている。気持ちは分かる。

しかし、そんな彼女の反応が見えていないのか、スケルン先輩は矢継ぎ早に言葉を紡いでいく。

「新しい出会いにテンションマックスでサーシーン！もうね、女の子大好きすぎちゃってね！

ごめんごめん、オレ酔ってるわぁー！マジ酔ってる！キ・ミ・に！なんつって！

はい、ドン引き！本いただきましたーっ！

……って、おおい！そんな遠くの席からツッコミとかいらねーし！愛が痛ってえわ！

あと、そっち！スベルンて呼ぶな、否定できねえーっ！」

…うるさい。そして、うるさい。

彼のマシンガントークのせいで当の女性客が完全に置いてきぼりにされているが、いいのだろうか？

ホント悪いねー等と軽く謝りつつ彼はどこか年寄り臭い動作で力シヤリと彼女の隣りに腰かける。

ようやくまともに接客かと思いきや、スケルン先輩の顔を間近で見た女性が唐突に爆笑し始めた。どうやら今までの言動が何気にツボに入っていたらしい。

何度か彼の顔を見ては笑いというのを繰り返していたが、5分ほど経つてようやく彼女も落ち着いてきたようだ。

その間、スケルン先輩は心配そうに声をかけながら肩で息をしている彼女の背を擦ったり、水を用意させたりと案外かいがいしく面倒を見ていた。

自分が笑われた事に対しては特に気にしていないらしい。

「っあー、ビビったーっ。めっちゃビビったー」。

オレが原因で笑死とか止めてー、マジでっ。洒落になんねーから！

いや、笑ってくれんのは正直すっげ嬉しいんだけどさあー。スマイルはハートのビタミンなワケだし？

でも、だからって、まさか面白すぎる事が罪になるとか思わねえじゃん！？

って、そーいや、こういう場合の罪状って何になるんだ？業務上過失致死？」

さすがに再び呼吸困難な状態に戻らないよう気を使っただ、彼は最初よりも若干テンションと声量を落として会話を始めた。

まあ、それでも自分にとっては充分騒がしいのだが…。

しばらくの間その調子で話し続けていた彼は、何を思ったのか急に勢い良く立ち上がって力強く叫び出す。

「そう、ここはオレのヘブン！そして、アルカディア！まさに、シヤングリラ！」

男に生まれて良かったぁーっ！

っつーわけで、ワリっ。ちよっ、異界の女神にお呼ばれしてるんで留守は頼んだ！」

ちよっという意味が分からないですね。…全く、どんな席移動の言い訳だ。

スケルン先輩はそのまま他の指名客の元へとスキップ交じりに去って行く。

女性は彼に向かって「いつてらっしゃーい」などと言いつつ笑顔で手を振っていた。順応力ハンパ無いな、彼女。

その後はさらにすごかった。

自分の指名客を団体客用の席へと集めてハーレム状態を築いたスケルン先輩は、ご機嫌で上着を脱ぎ骨芸とやらを披露したり、全員で学生時代の懐かしい手遊びに興じたりと、まさにやりたい放題。ここが広大な店舗を持つレジエンスで無ければ、営業妨害で追い出されてもおかしくないんじゃないかと言っはしゃぎっぷりだ。

「いやぁー、楽しかった楽しかった！

良かったらまた来てよー。オレめっちゃ待ってるし！
そんじゃねーっ！」

女性の帰り際、右手を大きく左右に振り回しながら満面の笑みで見送るスケルン先輩。

彼女も未だ興奮さめやらぬといった風情で、足取り軽く帰路に着

いていた。

学ぶ事が全く無かったとは言わないが、ただ、この接客方法は彼にしか許されないものだと思う。

今度、オーナーにスケルン先輩のヘルプを減らして貰うように頼んでみようと思決意した夜だった。

ドS先輩に改名すべきドリー先輩の場合

植物だからと言ってなぜ裸ネクタイが許されるのか、その辺の警察官をとっ捕まえて小一時間ほど問い詰めたい。

通報されて然るべきだ。こんな世の中、間違ってる。

これは私怨では無い。先日、世紀末に生きるモヒカン男の真似を強要された私怨混じりの意見などでは断じて無い。

しょっ引かれて性格が少しでも矯正されれば良いのにかと思っ
ない。ちよつとしか。

ちよんつと飛び乗るように女性客の隣りに座って、足をぶらつか
せながら少年のような声で話しかけるドリー先輩。

「こんばんはーっ。ボク、ドリー。

今日はご指名ありがとねっ。」

小首を傾げる仕草が何ともあざとい。

女性も早速騙されているようで、可愛いなどと言いつつ瞳をきら
めかせている。

その様子に手ごたえでも感じたのか、彼は両手で口を押さえてク
スクスと笑いだした。

頭の上の花がそれに合わせて小さく揺れている。

「ふふ、ボクかわいいーい？」

お姉さんみたいなキレイな人に言ってもらえると、とっても嬉しいな。」

ぐあつ。と、鳥肌が…っ。自分の年を考えるとオッサン。

なあにがお姉さんだ、何が。確実にドリー先輩より彼女の方が年下じゃないか。

軽く腕を擦りながらそんな事を考えた瞬間、女性の死角から彼の根が1本飛ぶように伸びてきて鞭のようにピシヤリと俺の背を打った。

痛いつ、ごめんなさいっ！

……うう、くそ。相変わらず、エスパー並みの悪口察知能力だ。後で精神的なお仕置きなどされなければ良いが…。

「ところで…。ねー、お姉さん。

ボクね、今すぐぐく飲みたいお酒があるんだけど、頼んでもいい？」

なっ！？

さすがドリー先輩、初手からおねだりなどと常人には出来ない事を平然とやってのける！

下から覗き込むようにジッと見つめられた女性は、たまらないといった風に頬に手を当ててあっさりと頷いた。

指名数に関しては上位3人から少しばかり離されているが、彼の1人あたりの売上はタツちゃん先輩に優るとも劣らない、恐ろしい実力を持つ男だ。

どうも聞いた話では、ドリー先輩は女性の服装等からおよその手

持ち金額を推測するのが得意なんだとか。

何だかんだでその額を超過するような要求をしないところから、
ともすればカツアゲにも似た彼の行為は単なる可愛いおねだりとして
プラス方向に処理されるらしい。

「あつ！ボク他にも指名あるんだつた！
んと。ごめんけど、ちょっと行ってくるねー？」

女性を持ち上げつつたかりを繰り返したドリー先輩は、ある程度
それを消費したところでハツと気がついたようにそう言った。

媚び売りシヨタオッサンの「こぼしちゃったー」だの「食べさせて？」だのといったわざとらしい甘え姿をさんざっぱら見せつけられて、
いい加減に胸やけがしそうだったこちらとしては大いに助かつゝ痛いつ、すみませんでした！

両足を揃えてテシツとソファーから降り、その短い脚をちょこちよこ
と動かしながら去って行くドリー先輩。

彼の計算され尽くした言動に、女性は小声で「可愛すぎる」だとか
「持つて帰りたい」だとか呟きながら遠ざかる後姿を凝視したまま
身もだえしていた。

本当に、自分の魅せ方というものを怖いくらい知り尽くしている
草だ。

時間が来て名残惜しそうな態度を見せる女性に、ドリー先輩は無
邪気な笑顔を向けて彼女の手の指をキュツと握り口を開く。

「また来てくれるんでしょ、お姉さん？
ボク、楽しみに待ってるからねっ。」

この女性客が、数日も経たない内に再び店を訪れたのは言うまでも
無い。

とりあえず、彼を見ていて自分の売りというものを理解して伸ばす事の重要さはよく分かった。

後日、仕事終わりに呼び出されてヘルプについた際の心構えや具体的な指導が行われ、いや、それは正直ありがたい話だとは思う。しかし、その間中パンイチにネクタイという屈辱的な格好をさせられた意味はついぞ分からなかった。

マイナスイオン放出疑惑浮上中のパパン先輩の場合

パパン先輩は背や尾、手足にヒレがあるせいか、一見すると布地を身体に巻きつけただけのような、ゆったりとした服装をしている事が多い。

例えるなら、西洋の神話に登場する人物たちのような、そんな格好である。

彼は誰に対しても丁寧な物腰と細やかな心遣いを忘れず、常に冷静で、それでいて駄目なところはハッキリと駄目だと口に出せる人間の出来たマーマンだ。

まるで理想の上司のような彼を、例え同い年でも自分は先輩として1番尊敬している。

当然タツちゃん先輩も尊敬はしているが、彼の場合、別次元の存在と言うか憧れの存在に過ぎて、ただの先輩として扱うには何とも恐れ多い。

「こんばんは、隣いいかな？」

柔らかに微笑みながら女性へと尋ねるパパン先輩。

座る前にこうやって本人の了承を得ようとするのは、この店では彼だけだ。

「初めまして。良い夜だね。

僕の名前はパパン。どうぞ、よろしく。」

そう言つて、彼は右手を差し出し握手を求める。

すると女性は一瞬の躊躇のあと、恐る恐るその手を取った。

触れた瞬間、あからさまにホツとする彼女にパパン先輩は小さく苦笑いをこぼす。

「マーマンに会つのは初めてかな？

せつかくの機会なんだし、気になる事があれば何でも聞いてね。」

マーマンと言う種族は数があまり多くなく、さらに陸上生活を選ぶ者が少ないため、イメージだけが先行して色々と誤解されている部分があるのだ。

例えば、淋しいと死んでしまうというウサギのデマのように、やれ魚介類しか食べられないだの、やれ陸上では身体から常に粘液を放出しているだの、やれ満月の夜は銚子を持って襲って来るだのといった、根も葉もない噂が世間に広がっている。

全く根拠の無い話なのだが、身近にマーマンが存在しないがゆえに、それが嘘か本当か判断をつけられないまま信じてしまふらしい。彼の存在を知って、興味本位でレジエンスを訪れる客も少なくは無い。

好奇の目に晒される事は決して良い気分ではないはずなのに、パパン先輩はいつだって紳士的な態度を崩さず接客している。

今日も、傍から聞いていればかなり失礼な質問をいくつも受けていながら、彼はその全てに笑顔で答えていた。

「あつ…と、ごめんね。そろそろ他の席も回らなくちゃいけなくて…。」

また戻って来るから、そうしたら今度は君の話を聞かせて欲しいな。」

本当に申し訳なさそうな表情で言って、パパン先輩は他の指名客の元へと移動する。

ちなみに常連客が相手の場合、彼の元にヘルプがつく事は少ない。他のホストには聞かせられない様な、深刻な相談事をする人間が多いからだ。

きつと、彼の纏う敬虔な聖職者にも似た、どこまでも清廉な空気がそうさせるのだろう。

自分の中にある汚く醜い部分を彼なら丸ごと受け入れてくれるんじゃないかと、そんな希望を抱かせる何かがあるのだ。

現に席に戻って来たパパン先輩に自身の事を話し始めた女性も、時が経つにつれ内容が悩みを打ち明ける方向へとシフトして行った。途中で彼に目配せされて席を外したが…。

帰りの際、どこかスッキリとした表情を見せる女性にパパン先輩の素晴らしいさを再認識する。

別れの言葉と共に小さく手を振る彼女に、彼は優しく微笑み告げた。

「辛くなったら、またおいで。僕はいつでもここにいるから。」

顔を少しばかり赤く腫らした女性は泣き笑いのような顔をして頷き、それから「ありがとう」と深く頭を下げて、自らのあるべき場所へと帰って行った。

ホストとして、また人間として、彼から学ぶべき事はきつといく

らでもあるのだろう。

胸の内でこっそり、こんな場所にいるより彼にはもっと相応しい場所があるんじゃないか…と思ったのは内緒の話だ。

山田の先輩観察記（後書き）

ちなみにりっちゃんが山田をこき使ったのは、常連になりそうな客だったから、双方に顔を覚えさせようとしたという超分かり辛い先輩心から。

人外会話集 タイマン編

トカゲと骨（営業中、店内フロア）

「オイ！うつせーぞ、スカル！おちおち話も出来やしねえじゃねーか！」

「誰がスカルだ、このハ虫類！オレは透ける…じゃねえ、スケルだ！大体、テメエのクソつまんねえ自慢話なんざ誰も聞いちゃいねーよ！」

「んだと！？脳が足りねえどころか入ってすらいねえ、どこもかしこもスツカス力骨野郎のクセしやがって！」

「貴様の無駄話が俺様の話より価値があるとでも思ってたのかよ！」
「人を骨粗鬆症みたいに言うんじゃねえーッ！オレの骨密度ナメてんのか、コラあ！」

「ああ！？意味分かんねえ事言ってるじゃねえよ、骨カス！そのヒヨロイ身体バラバラに分解してやるか？」

「おーお、上等だ！やってみろや、オラ！
テメエの邪魔くせえ尻尾ぶった切って再生するかどうか実験してやんよ！」

ひとくちメモ：2人の喧嘩は恒例行事

牛と草（営業中、休憩室）

「タツちゃん、またスカウト来たんだ？」

「ああ、ドリー先輩。まあ、そうですね。いつもの事ですよ。」

「ははっ、ボクたちにしたらそうだね。今回はどこから？」

獣人系のフアング？それとも筋肉系のビルダーズ？もしかして、
角系の一本鬼かな？^{いっぽんぎ}」

「いや、そのどれでもない。大地です。」

「あー、茶系のおそこ。最近落ち目なんだよねえ。」

にしたって、レジエンスから引き抜きしようだなんて冒険もいい
ところだよ。」

「それだけ必死なんでしょう。」

「…またこっそり援助しようだなんて、止めときなよー？
君ってば本当にお人好しなんだから。」

ひとくちメモ：ドリーは情報通

骨と魚（開店準備中、ロッカー）

「あ、スケルン先輩。約束の僕の鱗のプレスレット完成しましたよ。」

「おお、ついに！」

「うわーっ、やっぱりヤベエなお前の鱗！マジ嬉しいわ。ありがとな
ー。」

「いえいえ、この程度お安いご用です。」

「じゃ、これ報酬な。っーか、ホントにこんな安値で良かったん？
出るトコ出りやあコレの10倍はつくだろ？」

「大丈夫です。僕としてはむしろ、そっちの事実の方が重かったり
するんですよ。」

「ただの鱗なのにつて。」

「はー。欲がねえなあパパンは。どこの聖人君子かつっーの。
オレにやあ真似できねー。」

ひとくちメモ：マーマンの鱗は高値で取引されており、パパンの

鱗は中でも上質の部類に位置する

牛とトカゲ（営業終了直後、店内フロア）

「疲れてませんか、タツちゃん先輩！肩お揉みますか！？」

「…いや、必要ない。」

「分かりました！

あ、ノド渴いてませんか、タツちゃん先輩！何かお持ちしましょうか！？」

「…今はいい。」

「そうですか！

じゃあ、小腹は空いてませんか、タツちゃん先輩！何かつまめるもの用意しましょうか！？」

「リザード…。」

「はいっ！何でしょう、タツちゃん先輩！」

「……そういう気遣いは、できれば俺よりも後輩ホストたちへ向けてやれ。」

お前のやり方に口を出す気は無いが、おそらくこのままだと……

いや、老婆心だ。スマン。」

「いえ！ありがとございます、タツちゃん先輩！肝に銘じておきます！」

ひとくちメモ：リッちゃんは憧れの存在を前にすると興奮のあまりキヤラ崩壊を起こす

草と魚（営業終了後、ロッカー）

「ボクがこの国に来ようと思った切っ掛けはねー。んーと、水かな

あ。」

「ああ、それは僕もあります。ここの軟水、良いですよね。」

「そうそう、そうなんだよーっ。種類も豊富だしさあ。」

「そんでもって、たまーに温泉水なんかに手を出しちゃったりしてえ。」

「分かります分かります。僕は由布のものがお気に入りですね。」

「そこで別府に行かないあたり分かってるねー。」

「でもさ、何だかんだ言って最後は故郷のすっごいハードな硬水が恋しくなっちゃったりしてさ。」

「高い代金払って、わざわざ定期的に取り寄せたりしちゃうんですよ。」

「うわー！あるある、ありすぎる！で、パパンの場合だと海水？」

「ですね。ルートを確保するのに苦労しました。」

ひとくちメモ：2人は海外出身

骨と牛（開店前、店内廊下）

「タツちゃん先輩。チーッス！」

「スケルンか。…早いな。」

「いやあー、それが聞いて下さいよーっ。」

「久々にダチと飲んでたんすけど、途中で腐敗衆ふはいしやうの奴らとバツタリ会っちゃってえー！」

「プライベートだっつーのに、いつまでも引き抜きがどうこうウツセエもんで、飲み比べで勝たらって条件出したんすよ。」

「したら、勝ったはいいいけど結局オールになっちゃって！んで、寝る暇もなく身だしなみだけ整えて即出勤ッスわ！」

「ったく、冗談じゃねえ！時と場合を考えろっつーんすよね！マジ無いわアイツら！」

「そうか。」

「あつ、でも仕事に手え抜かねーッスから！」

「ていうか、オレが女の子前にしてテンションダウンとかありえねーっ！」

「……まあ、無理のない程度にな。」

「了解。つつつても、ワンオール程度余裕ッスよ！心配あざッス！」

ひとくちメモ：腐敗衆はアンデッド系ホストクラブ

トカゲと魚（営業中、手洗い場）

「……………」

「……………」

「……リッちゃん先輩。」

「あ？」

「この前はありがとうございました。」

「はあ？んだそりや。意味分かんねえし。」

「僕がお客様から相談を受けていたから、スケルン先輩が隣の席で盛り上がっているのを諫めて下さったんですね。」

あのままだったら、大事な話を聞き逃してしまうところでした。

だから……、ありがとうございます。

リッちゃん先輩にはいつも憎まれ役を買って出ただいて、とても感謝しているんです。」

「別に、俺様はあの骨野郎が気に食わなかったただけだ。

勝手に変な解釈してんな、バあ力。」

「それでも、僕は助かりましたので。」

「……ふんっ。」

ひとくちメモ：ツンツンデレデレ

草と骨（出勤途中、道端）

「ハロー、スケルーン？」

「ゲッ、ドリー先輩！」

「おやあー？先輩に向かってゲッてのは無いんじゃないかなあー？君が先日のオール帰り、酔って電柱を必死に口説いた挙句、情けなくもゲロっちゃった事…」

皆にバラしちゃってもいいのーお？」

「おわあーっ！ちよっ、まっ、止めて下さい！謝ります！謝りますから！」

「つーか、毎回毎回そんな情報どっから仕入れて来るんスカ！」

「くすくす。ボクは何でも知っている。

ということ、黙っていて欲しかったら今度リバイブのコース奢ってよー。」

「リバ…、ってあのメチャクチャ高い創作料理屋！？

勘弁して下さいよ、もーっ！」

ひとくちメモ：リバイブはあまりの美味しさに死人すら蘇るとい
う伝説を持つ料理人の店

牛と魚（帰宅途中、車内）

「すみません、タツちゃん先輩。いつも送ってもらっちゃって。」

「構わんさ。それより、お袋さんは元気か？」

「ええ、おかげさまで。術後の経過も順調で、年内には退院も出来るだろうつてお医者様が。」

「そりゃあ良かった。退院した暁には、何か祝いの品でも贈らせてもらおう。」

「ありがとうございます。……………何もかもタツちゃん先輩のおかげです。」

「いや…。お前さんが自分でチャンスを掴んだんだ。俺はその手助けをしたに過ぎねえさ。」

「でも、僕には無くてはならない手助けでした。この恩は一生かけてでも返させていただきます。」

「…難儀な性格だ。」

「でも、それが僕の良い所なんでしょう?」

「ふ…。違うない。」

ひとくちメモ：タツちゃんの愛車はランボルギーニカウンタック

トカゲと草（営業中、店内廊下）

「リツちゃん。ちょっとそこ通るから、尻尾の向き変えてもらっていいかな?」

「あ。スミマセン、ドリー先輩。」

「そうそう、そういえばね。」

昨日、スケルンにリバイブのコース料理奢ってもらっちゃったんだ。」

「…骨野郎に? ドリー先輩が?」

「うんつ。」

さすが、ナンバー3だけあって彼つてば太っ腹だよねえー。いやあ、美味しかったなー。」

「だったら今度、アイツより売れてる俺がもっと良い所に連れて行ってあげますよ。」

空いてる日、教えてください。」

「えっ、ホントっ!？」

やったあー! やっぱり持つべきものは優秀な後輩だねっ!
スケルンよりよっぽど頼りになるや!」

「ふっ。まあ、当然です。」

ひとくちメモ：×ドリー策士↓。リッちゃんギザチヨロス

人外会話集 タイマン編（後書き）

2011.11.05みてみんなにキャラ落書き投稿済。
作者名か作品名で検索すれば出てきます。鉛筆クオリティにつき注意。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2169y/>

ただし情熱は鼻から出る

2011年11月12日00時41分発行